W-4

言語類型論の諸問題に対する帰納的アプローチ

―『語学研究所論集』特集データを活用して―

趣旨

欧米では WALS や Grambank など言語類型論的なデータの集積・整理が進んでいる。ただしこれらのデータは既存の文法記述等からデータを集めたもので、統一的な調査票に基づくものではない。一方日本では近年言語類型論的な研究も行われてきているものの、特定のテーマについて各個別言語の研究者の論文（主に日本語と対象言語との対照）を集めたものが多く、一定以上の数の言語を同時に扱って通言語的な仮説の提示を目指したものはきわめて少ない。

このような状況下にあって、東京外国語大学の『語学研究所論集』（以下『語研論集』とする）では 2009 年以降 10 年に亘って 10 のテーマに関する「特集」データを収集してきた。すなわち、(1)受動表現、(2)アスペクト、(3)モダリティ、(4)ヴォイスとその周辺、(5)所有・存在表現、(6)他動性、(7)連用修飾的複文、(8)情報構造と名詞述語文、(9)情報標示の諸要素、(10)否定、形容詞と連体修飾複文、である。2020 年以降はそれまでの特集でデータの得られていなかった言語の補遺の蓄積を続けてきた。現在そのデータはのべ言語数で 79 言語、総特集数で 254 となっている。利用に便利なデータベースも作成し公開している（http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/contents/database.html）。

しかし類型論研究のデータベースというにはまだまだ地域／系統／類型のバリエーションも不足している上に、総言語数も少ない。一方こうしたデータベースはこれを活用し、対照言語学的／言語類型論的研究を行ってこそはじめてその価値を発揮するものである。本ワークショップでは具体的にはヴォイス、アスペクト、情報構造、連体修飾節／関係節の 4 つの問題を取り扱い、類型論的な仮説を提案するとともに、特集データ活用の可能性を示す。

構成

[1] 企画者・司会者（風間伸次郎）による趣旨説明（5 分）
[2] 研究発表（各 25 分）
　発表 1：岡本進「自他交替とヴォイスの相関についての類型論的考察」
　発表 2：風間伸次郎「アスペクトと動詞連続に関する類型的考察」
　発表 3：小林剛士「とりたてに関する類型論的考察」
　発表 4：小林颯「連体修飾に関する類型論的考察」
[3] コメンテーター（山本恭裕）からのコメント（5 分）
[4] 全体討論（参加者との質疑応答・総括）（10 分）

各発表の要旨

1. 自他交替とヴォイスの相関についての類型論的考察

本発表は『語研論集』のデータを用い、動詞の自他交替パタンとヴォイス（使役、再帰、受動）との相関関係を通言語的に考察するものである。まず自他交替のパタンによって 56 の対象言語を①他動化、②非他動化、③中立（両極）、④不安定動詞（自他同形）に分類する（ナロック・パルデシ・桐生 (2015) の枠組みによる）。さらにそのそれぞれの形態的手法が使役や再帰、受動の態の形式と同じであるか、つまりこれらの態と連続しているかという点に注目して各パタンの言語をさらに下位分類する。その上で各パタンの言語の例文を検証しつつ、分類された言語群の地理的な偏りや類型論的な特徴を指摘する。例えば、ヨーロッパでは非他動化と再帰が、ユーラシア大陸（アルタイ諸言語と朝鮮語）では非他動化と受動がそれぞれ連続し、不安定動詞は地域にかかわらず、孤立型の言語で用いられている。

2. アスペクトと動詞連続に関する類型論的考察

本発表は『語研論集』の 43 言語のデータにより、まず先行研究が提示している 2 つの仮説、すなわち Comrie (1976) によるアスペクトの（下位）分類に関する通言語的な仮説と、恒常的真理を示す形式が無標であるという仮説を検証する。次に動詞連続のタイプに関して、対象言語を ①副動詞形使用／非使用と②（名詞の並列にも使われる）接続詞の使用／非使用という観点から分類する。副動詞形を使用する言語においては、文中の副動詞形は文末の動詞に対する相対的な関係を示すにとどまっているため、その関係の種類に応じて異なった副動詞形が必要とされる。これに対し屈折型の言語ではアスペクト、テンス、モダリティ、人称といった屈折カテゴリーが十分に標示できる定動詞を用いるため、機能的な負担の少ない一つの接続詞を広く使用する傾向があることを示す。動詞連続のタイプにより分類された言語群の類型論的な特徴も指摘する。

3. とりたてに関する類型論的考察

本発表は『語研論集』所載の 49 言語の限定と極端のとりたて表現文をデータとして、文構造を調査した（通常、移動、分裂文）。調査の結果、本発表は以下を主張する:

① 語順・格の有無の 2 つは文構造の交替の有無と相関した。この相関を根拠に井戸 (2021) の文構造の交替は主語が焦点を回避するために起こるとする説を支持するが、補足説明を加える。

② 限定では主に分裂文が見られたが、極端では分裂文は全く見られず移動が少し見られる。

③ 分裂文を用いる言語は分裂文をもっぱら限定にのみ用いる一方、移動を用いる言語はたいてい移動を限定にも極端にも用いる。

④ 通言語的な限定と極端の振る舞いの違い（=上記 ②）、分裂文と移動の分布の違い（=上記 ③）、を説明する 2 種類の仮説を提案する。

⑤ 例外的な言語に対して可能な限り共通特徴を指摘しつつ、今後の課題を示す。

4. 連体修飾に関する類型論的考察

本発表では諸言語にみられる連体修飾表現を類型論的観点から考察する。その際にはまず Comrie and Kuteva (2013) の類型論的な分類の枠組みを参考にし、『語研論集』の 38 の言語における 3 種の連体修飾複文のデータ（内の関係で、被修飾名詞が｛(1)主語／(2)目的語／(3)場所｝であるもの）の分析を行った。これにより対象言語を ①関係詞優勢のタイプの言語群と②空所一貫型のタイプの言語群に分類した。一方で『語研論集』の別のデータによって、対象言語における他動詞文における無生物主語の許容／非許容を調べた。その結果、連体修飾節のタイプの違いと無生物主語の許容／非許容には相関があることを見出した。さらに連体修飾節のタイプの地理的分布の偏りや、基本語順を中心とした他の類型論的特徴と連体修飾節のタイプとの相関についても指摘を行う。

参考文献

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press. / Comrie, Bernard and Tania Kuteva (2013) Relativization on Subjects. In Dryer, Matthew S. and Martin Haspelmath (eds.) *WALS Online* (v2020.3) [Data set]. Zenodo. / 井戸美里 (2021)「日本語のとりたて表現と言語類型論」窪薗晴夫・野田尚史・パルデシ, プラシャント・松本曜（編）『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』98-124. 東京: 開拓社. / ナロック, ハイコ・パルデシ, プラシャント・桐生和幸 (2015)「序論」パルデシ, プラシャント・桐生和幸・ナロック, ハイコ（編）『有対動詞の通言語的研究: 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』1-21. 東京: くろしお出版. /『語学研究所論集』14 号-27 号.